

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：24501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770111

研究課題名(和文) アメリカ核文学研究と北米先住民作家

研究課題名(英文) Study of American Nuclear Literature and Native American Writers

研究代表者

松永 京子 (Matsunaga, Kyoko)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：50612529

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、既存のアメリカ核文学の枠組みをより幅広く多角的な文学的枠組みへと再構築するため、核・原爆問題を取り入れた北米先住民作家の作品を中心に、ポストコロニアリズム理論やエコクリティシズム理論の視座から検証した。具体的には、レスリー・マーモン・シルコー、マリルー・アウィアクタ、ピーター・マシーセン、バフィー・セントメリーらの文学作品や楽曲を、冷戦時代におけるアメリカのニュークリアリズムやウラン鉱山をめぐる「検閲」の問題と絡めて解読した。また、ジュリエット・S・コウノやジョイ・コガワらの作品における被爆者の身体表象の問題や、ラングストン・ヒューズの短編における核・原爆表象の検証に着手した。

研究成果の概要(英文)：In order to rework the literary framework of American nuclear literature into a wider and more diverse one, I examined Native (and non-Native) American literature dealing with concerns about atomic weapons and nuclear matters from postcolonial and ecocritical perspectives. Specifically, I analyzed the representation of nuclearism in America during the Cold War period through the works of Leslie Marmon Silko and Marilou Awiakta; issues of "censorship" in a non-fiction text by Peter Matthiessen; and representation of nuclear history in the music of Buffy Sainte-Marie. I also started to examine the representation of hibakusha bodies in works by Juliet Kono and Joy Kogawa and the depiction of the atomic bombs in short stories by Langston Hughes.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 核文学 原爆 先住民文学

## 1. 研究開始当初の背景

アメリカ核文学研究は 1980 年代以降に著しい発展を示してきた。特に 1984 年、『ダイアクリティックス (diacritics)』誌に掲載された「核批評 (Nuclear Critics)」特集は、ジャック・デリダを含めた 7 人の研究者による様々な分野からのアプローチを展開し、核問題を科学や政治的戦略の場面から、哲学や文学といった人文学の領域へと押し広げ、「核批評」というジャンルを確立した重要な分岐点である。また、80 年代後半から 90 年代前半にかけては、核戦争や核戦争後の世界を描いた 1,200 以上の小説や短編を解説したポール・ブライアン『ニュークリア・ホロコースト—小説における原子戦争』(1987) や、450 以上の核・原爆関連文献を「原子科学者の伝記」や「文学における原子爆弾」といった項目ごとにまとめたハンス・G・グラッツァーとラリー・M・ブラウニングの『原子爆弾--解題書目』(1992) など、1945 年以降のアメリカ核文学を体系的にまとめる作業が行われている。

核をテーマとした文学研究書には、核時代における詩の意義と役割を研究したジョン・ゲリーの『核による全滅と現代アメリカ詩』(1996)、核兵器がアメリカ文化と心理にどのような影響を与えてきたのかを SF 小説に読み解く H.ブルース・フランクリンの『最終兵器の夢—「平和のための戦争」とアメリカ SF の想像力』(2008)、1945 年から 2005 年までのアメリカ文学がどのように「核の不安」を描いてきたかを分析したダニエル・コードルの『ステイト・オブ・サスペンス—核時代、ポストモダニズム、アメリカ小説と散文』(2010) がある。

これらの先行研究は、核・原爆をテーマとしたアメリカ文学作品を包括的に捉える重要な研究といえる。しかし、これらの研究史には以下の 3 つの問題点があった。(1) 核批評と核文学研究のほとんどが「核による絶滅」を前提に、「核の不安」や終末論的想像力といった限定的なテーマに集中している (2) ウラニウム鉱山、核実験、核廃棄物処理場などの問題を扱った作品がほとんど含まれておらず、植民地主義や環境問題に言及している研究もない (3) 唯一『ステイト・オブ・サスペンス』がシルコーに言及しているものの、これらの研究のほとんどが先住民作家や文化的多様性といった点を考慮していない。

一方で、1990 年代以降、地域学や先住民研究などの領域で調査が押し進められてきた先住民と核の関係は、近年、文学領域においても重要なテーマとして取り上げられ

るようになった。なかでも 2001 年に出版されたジョニ・アダムソンの研究書『アメリカ・インディアン文学、環境正義、そしてエコクリティシズム』は、サイモン・J・オーティーズ (アコマ・プエブロ族) やシルコーの作品に描かれる原爆、ウラニウム鉱山、核廃棄物処理の問題を、1980 年代に興隆した環境正義運動 (人種や階級など社会的要素に基づく不平等な環境保護の現状を改善することを目的とした運動) に結びつけた先駆的研究書の一つである。より包括的でマルチカルチュラルな「場所」や「正義」といった概念を発達させる必要性を説くアダムソンの研究姿勢は、シャネット・ロメロや T.V.リードなど、シルコーの作品を社会運動や環境正義の視点から考察する米文学研究者にも引き継がれている。

北米先住民文学と核のかかわりはこのように、文学領域においても着実に発展しつつある。しかし、これらの研究はあくまでもアメリカ南西部といった地域限定的な枠組み、あるいは環境正義といった限られた分野から研究されたもので、アメリカ核文学研究の枠組みから論じられてこなかった。また、研究対象も一人の先住民作家に絞ったものが多く、先住民作家による核のナラティブを体系的に捉えるには十分な研究にいたっていない。そこで本研究では、シルコーやアウィアクタといった特定の先住民作家の核・原爆表象を、本研究代表者がこれまでに行ってきたオーティーズ、ヴィゼナー、アレクシーの先住民作家研究と照らし合わせて分析し、北米先住民作家による核のナラティブを包括的、体系的に調査・研究するに至った。さらに、既存のアメリカ核文学研究に欠如していたポストコロニアル理論やエコクリティシズムの視点を取り入れることで、アメリカ核文学研究の枠組みをより広域な文学的枠組みへと更新することを試みることにした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、核をめぐる終末論的想像力やアポカリプスの言説のオルタナティブとして、北米先住民作家による核のナラティブを提示し、既存のアメリカ核文学の枠組みをより幅広く多角的な文学的枠組みへと再構築することにある。特に核・原爆問題を取り入れたレスリー・マーモン・シルコー (ラグーナ・プエブロ族) の小説やマリルー・アウィアクタ (チェロキー族) の詩をポストコロニアル理論やエコクリティシズムの観点から解読し、他の先住民作家の作品と比較研究しながら、包括的で多文化主義的な核文学の広がりを検証することを目的とした。

### 3. 研究の方法

25年度と26年度は、レスリー・マーモン・シルコーの小説『セレモニー』と『死者の暦』の地理的・歴史的・社会的背景を調査し、冷戦時代におけるアメリカ南西部とニュークリアリズムという視点から解読を行った。また、アパラチア山脈における核施設の歴史や核科学史の調査に基づいて、アウィアクタの詩集『永遠のアパラチア—山と原子の出会いと場所』を解読し、作者の原子力や核に対する立場や考えを明らかにした。さらに、ポストコロニアル理論やエコクリティシズムの視座といった、これまでアメリカ核文学研究において見過ごされがちであったテーマや視点を明らかにするために、既存の北米アメリカ文学をテーマごとに分類・分類する作業にとりかかりはじめた。この段階において、日系アメリカ人作家として知られるルース・L・オゼキの『あるときの物語』(2013)といった作品の重要性を確認し、3.11以降のトランスパシフィック・ナラティブという新たなテーマの必要性が浮き彫りになった。さらに26年度は、W・E・B デュボイス、ラングストン・ヒューズ、ゾラ・ニール・ハーストン、アリス・ウォーカーといった作家らの反核思想や原爆表象に注目し、植民地主義や人種問題をテーマとしたアフリカ系アメリカ文学における核のナラティブの研究にも着手した。

最終年度は、以下の三つの研究・調査を行った。(1) 1970年代にパインリッジ居留地で起こったAIMメンバーとFBIらの抗争を、ウラン鉱山の問題と絡めて追求したピーター・マシーセンの文学作品やバフィー・セントメリーの楽曲に注目し、ウラン鉱山と「検閲」の問題を考察した(2) 日系アメリカ人・カナダ人作家による核・原爆表象を検証するため、ジュリエット・S・コウノ『暗愁』、ジョイ・コガワ『オバサン』、小田実『HIROSHIMA』を比較し、作家によって「再生」される日系被爆者の身体の問題を検証した(3) アフリカ系作家による反核思想や原爆表象の調査を開始し、ラングストン・ヒューズの短編小説における原爆表象を人種や環境問題と絡めて分析した。

### 4. 研究成果

25年度に行ったシルコー作品におけるアメリカ南西部のニュークリアリズムの調査・分析は、論文“Leslie Marmon Silko and Nuclear Dissent in the American Southwest”としてまとめた。また、原子力や核をめぐるアウィアクタの詩作品の調査・読解は、

中四国アメリカ文学会や九州アメリカ文学会で発表し、まとめたものを論文「科学と詩学が会うところ—マリン・アウィアクタと原子のナラティブ」として学会誌に発表した。

26年度に着手したオゼキ小説と3.11以降のトランスパシフィックな環境問題の関係の調査・分析は、Asian American Literature Associationの国際シンポジウムやWestern Literature Association学会で発表し、最終的に論文“Before and After the Quake: Ruth L. Ozeki’s Global Narrative in the Nuclear Age”としてまとめ、学会誌等に発表した。

最終年度におこなった、ウラン鉱山と「検閲」をめぐるマシーセン作品とセントメリーの楽曲の調査・分析は、ASLE-US大会で発表、ヒューズの短編小説における原爆表象の調査・分析は、中四国アメリカ学会や外大英米学会等で発表した。最終年度は、北米先住民作家による核のナラティブの研究をまとめ、出版するための準備に着手した。この作業は28年度現在も継続中である。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

- ① MATSUNAGA, Kyoko. “Before and After the Quake: Ruth L. Ozeki’s Global Narrative in the Nuclear Age.” *AALA Journal*. No.20, 2014, pp.84-96. 査読無
- ② MATSUNAGA, Kyoko. “Leslie Marmon Silko and Nuclear Dissent in the American Southwest” *Japanese Journal of American Studies*. No. 25, 2014, pp. 67-87. 査読有
- ③ 松永 京子、「原子と科学が会うところ—マリン・アウィアクタと原子のナラティブ」『原爆文学研究』12号、2013、pp. 122-135. 査読無

[学会発表] (計 11件)

- ① 松永 京子、「ジェラルド・ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』—大田洋子と「ネイティブ・サヴァイヴァンス」」国際会議「核・原爆と表象／文学」、2015年12月12日、九州大学西新プラザ大会議室、福岡市、福岡県
- ② 松永 京子、「原爆、人種、環境—Langston Hughesの“Simple” Storiesを中心に」第19回神戸市外国語大学英米学会、2015年12月6日、神戸市外国語大学ユニティ、神戸市、兵庫県
- ③ 松永 京子、「公民権運動と反核運動のはざま—アフリカ系アメリカ文学に

- おける核・原爆表象の考察」 中四国アメリカ学会第43回年次大会シンポジウム「ヒロシマとアメリカ」 2015年11月28日、県立広島大学、広島市、広島県
- ④ 松永 京子、「「再生」される *hibakusha* の身体—日系アメリカ文学における *hibakusha* 表象」第28回エコクリティシズム研究学会大会ワークショップ「日系アメリカ文学と原爆—Juliet S. Konoの *Anshu* をめぐって」2015年8月8日、広島市立大学サテライトキャンパス、広島市、広島県
- ⑤ MATSUNAGA, Kyoko. “Mining the Uranium Narrative: Environmental Injustice, the Oglala Incident, and Censorship.” ASLE Eleventh Biennial Conference. June 24, 2015. University of Idaho, Idaho, USA
- ⑥ MATSUNAGA, Kyoko. “From Tohoku to Desolation Sound: Ruth L. Ozeki’s Transpacific Eco-Narrative.” Western Literature Association Conference. Nov. 7, 2014. Victoria, British Columbia, USA
- ⑦ MATSUNAGA, Kyoko. “Before and After the Quake: Ruth L. Ozeki’s Global Narrative in the Nuclear Age.” Asian American Literature Association in Japan. 25<sup>th</sup> Anniversary International Forum. Sept. 28, 2014. Kyoto University of Foreign Studies, Kyoto, Japan
- ⑧ 松永 京子、「3.11以降のトランスパシフィック・ナラティブ—Ruth L. Ozekiの *A Tale for the Time Being* を中心に」中・四国アメリカ学会第43回年次大会シンポジウム「アメリカ研究のグローバル化1—太平洋世界とアメリカ」 2013年11月30日、広島経済大学立町キャンパス、広島市、広島県
- ⑨ MATSUNAGA, Kyoko. “Re-Considering Thea’s Ecological Epiphany in Willa Cather’s *The Song of the Lark*.” The 14<sup>th</sup> Willa Cather International Seminar. June 17, 2013. Flagstaff, Arizona, USA
- ⑩ 松永 京子、「科学と原子が会おうところ—マリルー・アウイアクタと原子をめぐるナラティブの挑戦」中・四国アメリカ文学学会第42回大会ワークショップ「カウンターナラティブから読むアメリカ文学」 2013年6月9日、松山大学、松山市、愛媛県
- ⑪ 松永 京子、「原子について語るとき—マリルー・アウイアクタと原子の詩学」九州アメリカ文学学会第59回大会シンポジウム「アトミック・エイジのアメリカ文学」 2013年5月11日、県立長崎シーボルト大学、長崎県、長崎市

〔図書〕(計 2件)

- ① 松永 京子 他、英宝社、『核と災害の表象—日米の応答と証言』2015、231頁  
担当箇所: 「震災後の記憶と想像力の行方—ルース・L・オゼキの『あるときの物語』をめぐって」 pp.170-184.
- ② MATSUNAGA, Kyoko, et al. Salem Press, *Critical Insights: American Multicultural Identity*, 2014, 238 頁  
担当箇所: “Bridging Borders: Leslie Marmon Silko’s Cross-Cultural Vision in the Atomic Age.” pp. 170-184.

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況 (計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等  
該当なし

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

松永 京子 (MATSUNAGA, Kyoko)  
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授  
研究者番号: 25770111